



中土佐町教育研究所

研究所だより



桜の開花が待ち遠しい季節となりました。皆様方におかれましては年度替わりの慌ただしい時期となり、ご多忙な毎日をお過ごしのことと存じます。

さて、元日に起きた能登半島地震、翌日には日航機事故と、大きな衝撃とともに令和6年がスタートしました。亡くなられた方々のご冥福と一日も早い復興をお祈りいたします。中土佐町は、南海トラフ地震の影響を大きく受ける位置環境となっており、町を上げて防災の意識を高めようと取組を進めている中で起きた能登半島地震。地震から間もない時期に、町の防災担当者から「もし中土佐で起こったらと考えると、今するべきことがたくさんある」という言葉に、危機管理、防災の取組を他人事とせず向き合っていくことの重要性を感じたところです。

さて、教育研究所では、本年度第3回目の中土佐検定を終え、採点・集計を行い、間違いランキングを作成して各学校に配付しました。また、本年度2回目の担当者会、研究所運営委員会を終えることができました。

中土佐検定は基礎学力の定着・習熟のために実施しています。この基礎学力とは、「読み、書き、計算」など、学校において児童生徒が学習する中で、情報を読み取ったり、処理したり、表現するための基になる能力のことです。人とのコミュニケーションをとる時や読書、新聞を読んだりする時も必要になります。

中土佐検定は10年以上歩み続け、成長してまいりました。検定(テキスト)は数学からスタートし、英語、算数、中学校漢字と内容も充実し、小学校向けに「ことばのきまり」も発行しました。取組を進めていくことで、中土佐町の子どもたちの基礎学力は定着し、学力調査においても結果が向上しました。町内各校が中土佐検定を効果的に活用し成果につながったといえます。しかしながら、近年、検定結果が設定基準を満たせないことも多く、中土佐検定の取組全体について見直しを図る必要があると感じています。

中土佐検定の実施について、教育研究所としても学校への趣旨の徹底を図り、課題を検証し、改善に努めたいと考えています。来年度もすべての児童生徒が検定に挑戦し少しでも「自信」や「やる気」に繋がることを願っています。この一年間、各学校の検定担当者の先生をはじめ、教職員の皆様には、中土佐検定への取組及び実施へのご協力をいただき、心から感謝とお礼を申し上げます。

さて、来年度から、本教育研究所の設置場所が「中土佐町こどもセンター」に移転します。本研究所では、設置当時から現在まで、中土佐検定を活用した基礎学力向上を重点に位置づけた取組が中心となっておりました。今後は、学力向上の取組に加えて、こどもセンターや適応指導教室との連携のもと、教育支援の研究も含めた新たな取組も進めていくこととなります。他市町村の研究所の取組を参考にさせていただきながら準備しているところです。今後ともどうかよろしくお願いいたします。

中土佐町教育研究所 所長 古谷智史

令和5年度 研究所の主な取組

- ① 中土佐検定の実施（小学校算数3回、中学校数学と英語3回、中学校漢字2回）
- ② 中土佐検定の結果分析と間違いランキングの作成
- ③ 中土佐検定テキスト修正（小学校【算数】中学校【数学・英語・漢字】）
- ④ 中土佐検定タブレット版テキストを作成・配信
- ⑤ 中土佐検定の取組支援（各学校の要望に対する支援）
- ⑥ 小学校体育におけるICTを取り入れた、主体的・対話的な授業づくりの研究
（研究員による教科研究テーマ）
- ⑦ 各種学力調査の結果分析と中土佐検定の関連調査
- ⑧ 各種会合の開催【研究所運営委員会（2回）、検定担当者会（小・中各2回）、教科担当者会（英数各1回）、教育委員会との打合せ会（8回）】
- ⑨ 各校の校内研修会・研究授業への参加
- ⑩ 情報発信（町広報紙掲載、研究所だより発行（4回）、ホームページ更新）
- ⑪ 研修会への参加（高知県教育研究所連絡協議会、教育研究所中西部地区連絡協議会研修会）
※高知県教育研究所秋季連絡協議会（中土佐大会）の開催

第3回 中土佐検定結果

令和5年度第3回の中土佐検定は、1月に中学校「数学」「英語」の検定を、2月に小学校「算数」の検定を実施しました。結果は次の通りです。

令和5年度 第3回 中土佐検定結果

小学校 算数

学年	1年生 (16級)	2年生 (13級)	3年生 (10級)	4年生 (7級)	5年生 (4級)	6年生 (1級)	町全体
受検者数	27	35	29	34	24	29	178
平均点	99.6	95.7	93.0	68.8	86.7	89.1	88.4
合格率(%)	100%	97%	97%	79%	100%	90%	93.5%

中学校 英語

学年	1年生 (7級)	2年生 (4級)	3年生 (1級)	町全体
受検者数	39	32	29	100
平均点	72.6	86.8	97.4	84.3
合格率(%)	64%	78%	97%	78%

学校で検定に取り組んでいる児童の様子



中学校 数学

学年	1年生 (7級)	2年生 (4級)	3年生 (1級)	町全体
受検者数	39	32	31	102
平均点	68.9	83.3	91.5	80.3
合格率(%)	62%	81%	90%	76%

第2回 中土佐検定担当者会

小・中学校の第2回中土佐検定担当者会をそれぞれ開催しました。年間の検定結果や各校の取組の成果や課題を共有しました。一部抜粋ですが掲載します。

会では、そのほか小中の検定テキスト、社会科副読本とことばのきまりテキストについて、改善のための対応について協議をしました。

小学校 成果

- ・継続して取り組むことで、計算力・思考力がついてきていると感じる。基礎学習の定着に有効だと考える。
- ・学習内容の定着を再度確認する機会となっている。学習したことの振り返り、復習ができています。
- ・検定日が決まっているのでそれに向けて取り組むことができる。プレテストに取り組むと、ある一定の成果が見られ、苦手な部分の克服にもつながっている。
- ・検定に向けて合格する意欲が高まっている。苦手な内容が理解できています。
- ・同じような問題を繰り返し解いていくことができ、習熟につながった
- ・テキストの活用方法は校内の支援体制を工夫し、個別指導に対応している。
- ・授業で学習したことの復習として活用できた。
- ・繰り返し問題を解くことで、基礎学力の定着に繋がった。
- ・自信につながっている。
- ・週時程に組み込むことで時間を決め継続して取り組んでいる。

小学校 課題

- ・定着が難しい児童がなかなか終わらない。
- ・学習したことの積み重ねが弱く、定着が難しい。
- ・合格率を上げたり、再試験へ意欲的に取り組んだりするように校内で取り組んでいくこと。
- ・低学年では量や内容も比較的取り組みやすいが高学年になるとどうなのかな？と思う。
- ・ページによっては計算スペースが小さく、書きづらそうにしていることがあった。
- ・個人の進度に合わせ、検定までに習熟を図ることがなかなか難しかった。
- ・3回目の検定については、準備や練習の時間が十分とれず大変だった
- ・答えとセットになっていることが良い時もあるが、家庭学習としては取り扱えないため、時間の確保が難しい。

中学校 成果

- ・検定1カ月前からの取組強化月間の設定
 - ①朝と夕に教科を指定し、学習タイムを実施した。
 - ②週末に、プレテストや過去問をコピーして家庭学習として取り組ませた。
- ・英数の再テストの日をずらして、一教科の学習に集中できるようにした。
- ・国語の授業内で、開始時に小テスト（漢字・語句・文法）を実施している。
- ・中土佐検定に向けた計画的な取り組みやプレテストを活用して、生徒一人一人の実態を正確に把握し、家庭学習などに対する支援を行うことができた。
- ・子どもたちの意欲を大切に、中土佐検定に積極的に取り組むことができるように、教員が計画性を持ち、取り組み内容の変更を適宜行うことで、子どもたちが自分の実態を正確に把握し、取り組みを行うことで、結果に表れた生徒が多く見られた。

中学校 課題

- ・支援が必要な生徒に対して、教員数が足りないため、個に応じた指導が十分行き届かなかった。
- ・検定を受けるために、学習進度を速める必要が出てしまったので、学力向上の一つの指針として検定を位置づけ、より計画的に学習を進めていく必要性を感じた。

第2回 研究所運営協議会

本年度第2回教育研究所運営委員会を、3月4日に開催しました。本年度の研究所の取組の総括や年間通した中土佐検定の結果等を確認し、委員の皆様より研究所運営についてのご意見をいただきました。一部抜粋ですが下記のような意見交換がありましたので報告します。

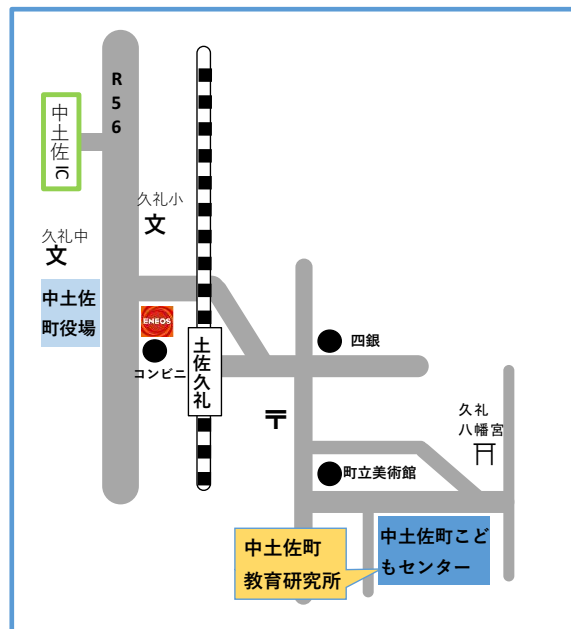
- 中土佐検定担当者の役割が重要だ。高いモチベーションを保ちながら検定を推進していくことで成果が上がるのではないかと。教育研究所が主催している会の内容や回数の検討等を行い、PDCA サイクルをまわしてはどうか。教員の意欲が高まるのが大切だ。
- 研究員の授業実践で、「考える」というキーワードがあるが、具体的にはどのような実践か。
- ICT 活用の場面で、自分の動画から課題を見つけ実践することで、どのようにすればよいか、次はこうしようと考えようになる。自分に合った課題・取り組みは、自己達成感が上がり、意欲にもつながる。
- 不登校対策を考えると、これから大事になってくるのは ICT の活用ではないか。ICT は個別支援のツールとして非常に有効だ。ICT 機器を介することで、不登校児童生徒が家庭にいても学習ができる。学校以外の居場所でも学習ができるようにしていく必要がある。そこに中土佐検定で果たす役割もあるのではないかと。
- 保護者は、教育研究所がどういう機関で、実施している中土佐検定のことも知らない人が多いのではないかと。大事なことなので保護者などに知ってもらうような取り組みを行ってはどうか。例えば PTA 役員会など、保護者が集まる会で、中土佐検定について周知してみてもどうか。
- 担当者会を小・中合同で実施してみてもどうか。小・中の連携で、課題を共有し、取り組み方法などを改善していくといいのではないかと。



さて、冒頭のあいさつでも申し上げましたとおり、令和6年度から中土佐町こどもセンター内に教育研究所が移転します。

中土佐町こどもセンターは、子育て等に関する情報や遊びの場の提供とともに、こどもに関するすべての相談窓口を集約し、安心した子育てを応援する機関として、令和4年度にオープンしました。妊娠、出産から子育て、こども自身が抱える悩みや不安の解消に向けての支援など、対象の年代に応じて、「子育て世代包括支援センター」「子育て支援センター『はぐ』」「子ども家庭総合相談支援拠点」「適応指導教室」「青少年育成センター」の5つの機能を一体的に行うことを目的として設立されています。

令和6年度から、教育研究所は適応指導教室と連携しながら、教育研究所としての調査研究を行っていくこととなります。具体的な研究内容については、次号でお知らせします。



研究所便り 令和5年度 第4号 発行 中土佐町教育研究所
〒789-1301 高知県高岡郡中土佐町久礼 6663-1
TEL 0889-52-2250 FAX 0889-52-2013 発行日 令和6年3月13日